
届け

うな

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

届け

【Nコード】

N4682BA

【作者名】

うな

【あらすじ】

尻尾があつたらいいのに。そうすれば、私のこと少しはあの人に伝わるのにな。

長谷部さんのお家にお呼ばれるのは初めてじゃなかったけれど、飲み会の帰りというシチュエーションには少しどきどきした。

綺麗に整頓された玄関。玄関は家の顔で、家は主の内面を写すと言うけれど、すっきりと隙なく機能的な玄関の様子は私の中の長谷部さんとは微妙に重ならなかった。

「汚いけど勘弁してね」

私がお邪魔しますと言う前に長谷部さんが言う。何処をどう見れば汚いところなんかあるんだろう、春先に来た時と変わらず長谷部さんの城は掃除婦でもいるのかと思う程に小綺麗だった。

一人暮らしの兄が二人いる身からしてみればこれはもう小さな奇蹟だ。リビングの真ん中に置かれたガラスのテーブルは顔が写るくらいピカピカに磨かれていて、床に食べさしのツマミが転がってることもビールの空き缶が散乱していることもなかった。

「お家の人にはちゃんと連絡した？」

「あ、はい。さっき車の中で、メールしました」

「一応、電話しといた方がいいんじゃない？ メールじゃ届いたか分かんないし」

テーブルと同じくらいピカピカに磨かれたグラスに入った透明な液体。ことりと置かれたのを上から見ると底が透けてタンポポのコースターが見える。いちいちセンスいいなあ、長谷部さん。

「とりあえずお水。一息ついたらちゃんと電話すること。また直也にどやされたくないからねえ」

「またって……ナオ、長谷部さんに何かしたんですか？」

「そんな大したことじゃないけどね。この前、河川敷でバーベキューしたでしょ？ その時、俺が蓉湖ちゃんにビール勧めたの見たれてたみたいで。「妹酔わせて何するつもりっすか!？」って、一分後ぐらいにわざわざメールで」

「あのバカ兄……。すいません、なんかもう色々子供で」

「そうだねえ。妹思いのいいお兄さんだと思っけど、ちょっと過保護が過ぎるかなあ。蓉湖ちゃんは今立派なレディでもないか」

「なんで胸見て視線逸したんですか!？」

「ごめんごめん、と笑う長谷部さん。セクハラすれすれ(というか、そのもの)のギャグもこの人が口にすると笑えてしまうのだから不思議だ。」

「ふんっ、どうせ私はないペタンですよ。悪うござんしたね」

「いやいや、そのお陰で安心して男役を任せられるから。ほんと、脚本楽でいいわあ」

「そういうフォローいらないですっ!」

大げさに怒ってみせると「流石は主演男優の演技は違うなあ」とちやちやを入れられる。男優じゃないだとか演技じゃないだとか色々突っ込むと、今度は「もしかして、本当は蓉湖くんだった?」なんて別の方向に話が飛んでいく。私と長谷部さんの場合、会話はキヤッチボールじゃなくてフリスビーだ。長谷部さんが投げたフリスビーを私がキヤッチする。多分、犬みたいに尻尾を振りながら。

尻尾があればいいのに。そうすれば、私の気持ちも少しは伝わるはずなのに。

長谷部さんと初めて出会ったのは、市民ホールにナオのサークルの演劇を見に行った時だった。その時私はまだ高校生で、更に言えば高3だった。

「受験の息抜きになるだろ?」なんて如何にもいい兄貴ぶったナオの誘いに乗って自転車で市民ホールへ行った。中に入ると思ったよりも人が入っていて、舞台近くの席は全て埋まっていた。

開演まではまだ少し時間があって、仕方なく入り口でもらった劇のチラシを読んで時間を潰した。全然知らないタイトル。どうやら

オリジナル劇のようで、脚本の欄には長谷部悠と書いてあった。

勿論その時の私は長谷部さんと知り合いでも何でもなかったからサラッと読み飛ばした。そして演劇が終わった後……その名前を胸に刻み込んだ。

言葉に出来ず、ただ身体が疼いた。賞賛の拍手がホールを満たす中、私はこの人の脚本で演じてみたいと静かに思っていた。それは一方的ではあったけれど間違いなく私と長谷部さんの“出会い”だった。

「電話、終わった？ 随分長かったけど、怒られた？」

「……それが、ナオのヤツが実家に帰ってたみたいで」

「うわ……それはそれは。月曜は二人で説教かな」

「大丈夫ですよ。ナオも真夜さん連れ込んでたみたいだし「女優に手を出すとかないわー」とか言っておけばいいんですよ」

「親公認の相手を持ちだしてもあんまりダメージないと思うけどなあ」

「そんなことないですよ。ナオ、人前で色恋を弄られるのすごい苦手なんです。だから十分牽制にはなりますよ」

「蓉湖ちゃんは遅しいなあ」

「男兄弟に囲まれてればこうもなりますよ」

そんな話をしながら二人でソファに腰掛けてココアを飲んだ。長谷部さんの入れるココアはちゃんとミルクでパウダーを練ってあって優しい味がする。猫舌な私のために冷ましてくれる気遣いが嬉しかった。

ナオと同じ年なんて信じられない。私よりたった二つ年上なだけなのに、長谷部さんはこんなに大人だ。

話が上手で、気配りができて、皆が避けて通ろうとすることをちゃんとできて。今日の飲み会だって長谷部さんは一滴もアルコールを飲んでいない。酔い潰れたり終電を逃したりする連中のためにわ

ざわぎ車で来てソフトドリンクを飲んでいた。幸い今回は何事も無くお開きになったので私はここにいる。「脚本について教えて欲しいことがある」なんて即興の嘘までついて。

尻尾が欲しい。大きく振って伝えたい。こんなにも好きなんです、長谷部さん。“出会った”時から出会う前から。私は痺れちゃってるんです。長谷部さんに。長谷部さんで。

「んー、ちよつと顔赤いね。もしかして、まだアルコール残ってる？」

「え？ あ、いや、その……ちよつと、だけ」

貴方のせいです長谷部さん。なんて、言えない。脚本に書かれた愛のセリフならいくらでも囁けるのに自分の口じゃ好きとさえ言えない。

ああそつだ、思い出した。私が演劇始めた理由がそれじゃん。言えないことを言いたいから。余計なことはいくらでも言えるのに本当に言いたいことは何一つ口にできない自分を変えたかったから。

なんだ……ちつとも成長してないじゃんか、私。流石に凹むわ。

「えつと……なんか、落ち込んでる？」

正解です、長谷部さん。というか、そんなことまで分かるなら私の気持ちも察して下さい。その口で好きとか言って下さい。抱きしめて蓉湖って呼び捨てで呼んで下さい。あ……だめだ、想像しただけで濡れそう。

「いや、濡れはしないけど」

「……なんの話かな？」

「なんでもないですよ」

甘いココアを啜って、隣に長谷部さんがいて。今なら酔っ払ってるって設定が使える。二人がけのソファは、そんなに広くない。

「脚本の話ですけど」

「急に話が跳んだね」

「はい。それで、脚本の話なんですけど」

「押すねえ。それで、脚本がどうしたの？」

「例えばですよ。例えば、私をヒロイン、長谷部さんを主人公とする恋愛劇があると思います」

「うん？」

「それで、二人がまさに結ばれようとする場面が今この瞬間だとします」

「……うん」

「長谷部さんなら、どう脚本を書きますか。この演劇のキモとなる一番ドラマチックで大切な場面です。ヒロインと主人公を、どう動かしますか？」

「それは」

何かを言いかけて、長谷部さんは口を一度閉じた。そしてそのまま天井と壁の接合点に視線を寄せて、二度頭を掻いた。

それは癖だ。長谷部さんが何かを真剣に考えている時の……脚本を書く時の。

きつと今、この人の世界に蓉湖はいない。私はたった今、無名の役者となって長谷部さんの中で再構成されている。長谷部さんはそういう人だ。演劇の事になると急に人が変わる。傍から見ればバレバレな私のアプローチだって脚本の例示としか見ていないのだ。

「よし」

集中し始めてから数分、再び長谷部さんの目が私を見た。完全に演劇モードだった。

「今から俺がいくらかセリフを投げかけるから、蓉湖は『うん』って答える。ニュアンスは任せる。いいか？」

「は、はい」

あまりの迫力に思わず腰が引けてしまう。本業は脚本なのに並の役者より演技ができるんだから、ほんとにこの人は演劇馬鹿だ。

「よ、蓉湖」

演技が始まったのか長谷部さんの手が私の肩に触れた。手が小刻みに震えて緊張が伝わってくる。……上手い。まるで演技じゃないみたい。

「蓉湖、話がある。聞いてくれるか？」

「う、うん……」

上ずった声。上目遣いに長谷部さんを見る。演技……これは演技だ。心のなかで何度か呟くと気恥ずかしさが消えて痺れるような緊張感が身体を満たした。少しずつ、私はヒロインになっていく。

「ずっと言いたかった。舞台上で演じる蓉湖を見てからずっと、俺は蓉湖のための脚本を書きたいと思ってた。四年前、学園祭で蓉湖を見てから、俺の中にはずっとお前が住んでいた」

「うんっ」

「好きだ、蓉湖。これからは俺だけのために演じて欲しい。舞台の上でも、それ以外でも。俺だけのためにその人生を演じきって欲しい。……いいな？」

「っ……うん！」

あまりの熱演に吞まれそうになる。まるでこれは演劇でもなんでもなく、本当の告白であるかのように錯覚してしまう。それはとても嬉しくて、けど悲しいことだった。例えば台詞だとしても長谷部さんに呼び捨てにされて、好きと言われて心が蕩けそになった。いや、たぶん蕩けている。私の心は長谷部さんの言葉でどろどろに溶けて形を失ってしまった。今はそれが心地よくて、すごく幸せで。だけど、それは所詮作り物の紛い物。この劇が終わってしまえば私と長谷部さんはいつもの関係に戻ってしまう。

……やだ。そんなの、やだ。

せつかく好きって言うてくれたのに、告白してくれたのに。長谷部さんが！ 私に！

そんなのやだ。嫌だよ……終わるなんてやだ。まだ始まってもないのに勝手に終わらせないで。私は、こんなに長谷部さんが好きなのに！

「大好き！　ずっと好きでした！　三年前市民ホールであなたが脚本をした演劇を見てから、顔も知らないあなたに恋してました！　好きで好きで大好きで、頑張って勉強しました。絶対受からないっ

て言われた大学にも合格しました！ 演劇サークルに入って初めてあなたの顔を見た時、声を聞いた時、話をしたとき、もっともっと好きになりました。大好きなのに大好きなのに、もっと好きになりました。もう好きすぎて頭おかしくなるぐらい大好きで大好きで！ なのに全然気づいてくれないなんて酷すぎます！ 理不尽です！ 責任とって下さい！ 私をこんなにした責任とって下さいロクデナシ！」

あ……終わった。こりゃ、絶対引かれた。なんだそれ。酷いって何が。理不尽で何が。ロクデナシって誰のことだ。ああ……もうなに言ってるか全然分かんない。

顔熱いし。頭茹だってるし。なんか涙ぼろぼろ流れてくるし。

「好きっ！ 大好き！ 結婚しろバカあ！」

まだ言うかこいつは。バカはお前だ。いい加減にしろ。今すぐ土下座して長谷部さんにお詫びしろ。身の程知らずなこと言っすいませんでしたって言えバカ蓉湖！

いいか、長谷部さんは素敵な人なんだ。優しくてカッコよくて演劇が大好きで。お前みたいなペタンの男女がいくら手を伸ばしたって届いたりしない。勘違いするな、お前は女として見られてなんかない。だからこうやって二人つきりでも平気な顔してるんだ。こんなに近くでいても、顔赤らめたり、しない、し、ぜんぜん、へい、きで、へ、いきで、う……ううううううう……！

「う……ひつぐ……はせべさん……はせべさあん……」

「……… 蓉湖ちゃん。ちよつと、落ち着いて、ね？」

「やだあ……すきなのお……はせべさんがだいすき……だいすきな……」

「それは分かったから。ちゃんと聞いてたよ。全部、聞いてたからだから、落ち着いて。俺に、返事を言わせて」

へん、じ……？ あれ？ わたし、だきしめられて……？

「よしよし。もう、可愛すぎてどうにかなっちゃいそうだ。俺も好きだよ、蓉湖ちゃん。演技中の台詞も全部本音。というか、俺でも

あそこまであからさまに言われれば流石に気づくよ」

えっ？ えっ？ えっ？

「直也には悪いけど……もう我慢するのはヤメだ。 蓉湖ちゃん、今日から俺の彼女。それでいい？」

「え？ 長谷部さん……いいの？ 私、なんかで……」

「はあ……お願いだから、あんまりベタな台詞言わせないでよ。仮にも演劇やつてるんだからもっと、こう、ウィットに富んだスマー トな会話をだねえ」

「……好き」

「あの、蓉湖ちゃん？」

「好き好き好き好き……大好き……愛してます……長谷部さん……好き。ちゅーして？ ちゅってして？ だめ？ 私のこと、きらい？」

「……いや、なんというか……突き抜ければ無駄な装飾はいらないんだね」

「好き……好き……」

「はいはい。俺も好きだよ、蓉湖」

その日、私と長谷部さんは初めてのキスをした。ココア味のキスは、少ししょっぱかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4682ba/>

届け

2012年1月12日20時47分発行